

## カシンの部屋 ー中国で活躍する卒業生に聞くー

2018年1月26日実施

西村 康氏

1981年一橋大学経済学部卒

双日株式会社 常務執行役員中国総代表 兼双日（中国）有限公司総経理



**カシン：**一橋大学中国交流センターのカシンです、今日は貴重なお時間をいただき有り難うございます。今回のインタビューは二つの目的があり、一つは、日本人の一橋生に、もっと中国を知ろうと思ってもらえるようにすること、もう一つは、中国の皆さんに、一橋大学を知ってもらおうきっかけになるようにすることです。

**カシン：**海外で働きたいという意識が強くて一橋大学に入った方が多いようですが、西村さんも海外に行ってみたくという理由で一橋大学を選んだのでしょうか？

**西村：**私は、海外よりは、日本国内の地域開発をやりたいと思っていました。

私は、愛知県の隣の三重県の伊勢出身です。伊勢はとても良い所ですが、いかんせん地方なので、東京など都市部との格差が大きく、当時は産業といえば伊勢神宮（観光資源）ぐらいしかありませんでした。地方では大学卒業後の就職先が少ないので、東京の良い大学を卒業しても、地方銀行に勤めるか、県庁等役所に就職するしかなかったわけです。また、姉が東京の音楽大学で勉強していたので、姉の影響もあり、また母も「男なら東京で一旗揚げておいで」と言っていましたし、東京に対する憧れもあり、そうしたことが東京に行ったことの原因ですね。

金融の仕事をやりたいとは思っていました。金融を通じて社会に貢献したい、とりわけ地域開発をやりたい。そこで実学に定評のあった、一橋を受験しました。

その当時、伊勢では、一橋大学のことは知られていなかったもので、どこの私立大学かと聞かれました。国立大学と分かってても、二期校だと思われたことが多かったです。

結局、一橋大学の経済学部に入って、山澤逸平先生の指導の下、国際経済、開発経済を専攻させていただきました。双日に入社する前にいた銀行時代には、外務省に出向して1989年から3年間ベルギーに駐在しました。国際経済の知識が大いに役に立ったと感謝しています。9年前に正式に双日に転籍し、今はこうして北京に中国総代表として駐在しています。

**カシ**：どうして開発経済なのですか？

**西村**：地方にいと、今の中国もそうですが、やっぱり地方と都市の所得格差が顕著で、地方の生活水準を改善しなければいけないという使命を感じました。

1981年の大学卒業後に就職した日本開発銀行（現在の日本政策投資銀行）も、当時は日本の地方開発が重要な政策課題の一つでした。

大学時代に、人生をどう過ごせばいいかと考えたら、なるべく大きな社会貢献ができる仕事に就きたいと考えました。それまでに、自分の人生を深く考えたことはなかったのですが、結局いろいろ考えた末に政策金融に身を置くことになったのです。

1980年代は日米貿易摩擦が酷かった時代です。今は米中貿易摩擦で、歴史は繰り返すとつくづく感じています。そんな状況の中アメリカから日本への輸入を促進したり、アメリカから日本への投資を促進する仕事を担当しました。アメリカから日本に投資をしてくれる企業に対しては、日本開発銀行から、安い金利で融資する制度がありました。私は、アメリカ国内各地のいろんな企業を訪問し対日進出を提案したり、アメリカからの輸入促進プロジェクトを担当しました。また、M&A のアドバイザーの仕事の立ち上げなども手がけました。日本企業を買収することで日本に進出したい企業も多かったからです。

**カシ**：北京にいらっやって何年ですか？

**西村**：中国はまだ10ヶ月です。

今まで中国との接点がありませんでしたが、M&A の仕事をしていた時に、上海に行ったりしたことはありました。北京との唯一の接点は2002年に、中国国家開発銀行とワークショップを開催したことがあります。当時、中国政府から、日本開発銀行のような政策金融機関を作りたいという希望があり、その立ち上げのお手伝いをしていました。中国国家開発銀行の幹部を集めて、日本の戦後の経済開発はどうやって行なったかについてレクチャーし、当時私は銀行で鉄道会社の融資を担当していたので、鉄道を使って都市交通網を整備し、いかに都市を発展させるか、東急、阪急のモデルケースを紹介したりしました。

**カシ**：実際に中国に住んでみるとどうですか？

**西村**：北京に縁があって、いまは一生懸命中国の歴史や社会構造を理解しようと、勉強しています。

個人情報に関する考え方などモノの考え方はやはり、日本人と違うことを感じます。日本ではよくPDCAサイクルで仕事をしますが、中国ではDCAPで、まずやってみて不都合があれば後から修正するやり方が主流です。

また富裕層と貧困層との暮らしぶりの格差や、列を作らず我先にという日々の行動の仕方も全然違うと感じました。

**カシ**：一嬌生は如水会の海外留学奨学金を利用して様々な留学ができるのですが、中国に留学する学生がそんなに多くないことについてどう思われますか？

**西村**：わが社も最近はずいぶん中国赴任希望者が少ないのが実情です。中国商売は難しいというのが何となく社内に雰囲気としてあります。中国への留学が少ないとは非常に残念です。皆、中国のことが分かってないんじゃないですかね。

中国の発展ぶりや良い所をもっとマスコミで報道してほしいと思います。

例えば今、私が住んでいるマンションでの出前はロボットです。普通は、出前の人が入館でセキュリティカードをもらって、注文した人の部屋まで届けにきます。私の場合は、出前が入館に届いたら、入館からロボットを出して、部屋まで届けにきます。入館の人が出前をそのロボットのお腹に入れて、部屋番号を入力、ロボットから私の部屋に「僕はこれから届けに参ります」という電話を掛けてくる。ピンポンの音を聞いて、ドアを開けると、ネクタイをしている可愛いロボット君がいます。お腹の画面の「開く」を押すと、おなかの中から弁当が現れます。弁当を受け取ると「さよなら」と中国語で言って、エレベーターに向かいました。たぶんロボットとエレベーターが連動していると思いますが、



ちゃんとまたエレベーターに乗って帰って行きました。充電の時には、掃除ロボットのルンバのように自動的に充電の場所に行きます。このように、中国では、日本で知られていないロボット活用の進展や、ウィチャットペイ、アリペイのようなスマホ決済の普及でキャッシュレス化は日本より遥かに進んでいます。日本でも最近、ようやくキャッシュレス社会構築に向けてスマホ決済のことが話題となり報道されるようになりました。その他出前アプリ、シェア自転車など、中国の進んだ面ももっと報道してほしいと思います。

今の中国は環境問題や格差問題、そして技術イノベーションの振興の必要性など、過去に日本の辿った道をもっといスピードで経験しているように思います。しかしながらきっと中国はこれらの課題を克服し、習近平さんの国家目標通り、今世紀の中ごろには世界の覇権を握り、中華民族の復興が実現しているのかもしれない。



**カシ**：今日は本当にありがとうございました。